

城田俊著
『現代ロシア語文法 (中・上級編)』
東洋書店, 2003 年, xi+299 頁

米 重 文 樹

本書は、1993 年に出版された同著者による『現代ロシア語文法』(以下『文法』)の続編として編まれたもので、『文法』と同じく「学習書」であることを基本方針とし、各課で扱う事項について例文、基本事項、説明、参考、そして練習問題、という順で学ぶ構成になっている。『文法』の方は初版発行以来既に 3 刷を重ねていて、大学その他の教育施設におけるロシア語学習者の長期的低迷を考えると意外な感がなくもないが、『文法』の読者の相当数はおそらく、ある程度ロシア語を勉強した、あるいはロシア語が関係する実務に就いている人たちで、中・上級文法に対する現実的な必要から手にしたと想像される。その場合本書は「学習書」としてではなく、文法参考書として活用されることになるが、この点を著者が念頭に置いていることは、『文法』の「利用法」の最後に「本書は、文法事項をできるだけ体系的・網羅的に述べているので、参照文法の役を兼ねることができる。索引を縦横に利用すれば、『文法辞典』として十分役立つと思われる」と明記してあることからものはっきりとかがえる。

本書は第 1 部文法、第 2 部表現法から成る。10 課から成る第 1 部では、名詞の単複および性を扱った最初の 2 課以外は格と体の用法に当てられている。これは、初級から中・上級に進む際の難関が「日本語と異なるシステムを持つ格と前置詞の意味・用法」および「アスペクト (完了体・不完了体) と時制のからみあい」であるという著者の「長年の経験から」の正当な帰結に基づいたものである。

格に関しては、『文法』で学習した主格・生格・与格・対格・造格・前置格という伝統的な順序ではなく、対格・主格・造格・与格・生格・前置格の順序で出すという新しい試みがなされた。これは「学習理解の難易度」を基準に組み替えられたものであるが、と同時に、ヤコブソンの格体系に相似していることは偶然ではなかろう。ただ、一般読者としては主格から始まるのが自然であることは確かで、ヤコブソンにおいてもその点は同じである。いずれにしても格を扱った第 3 課から第 8 課までは、「最初から最後まで読み通す必要はない。学習・研究の過程で遭遇する格の意味・用法の諸相の確認のために使用して頂けたらそれで充分

である」と著者も断っているように、参照文法として書かれたもので、個々の格の用法が丹念に網羅され、関係事項への参照指示も親切である。本書の記述の優れている点は、当該文法事項の説明のみを挙げるのではなく、それに関連あるいは隣接する表現へと展開させている点にある。例えば、個々の格の用法説明の中に他の格 (および他の言語手段) を用いた同義表現が適宜盛り込まれ、ニュアンス・文体・使用条件などについての説明もなされている (例えば, Мы работали прошлую зиму / прошлой зимой на заводе.; Мы шли лесом / по лесу.; дом отца / отцовский дом; Я ещё не прочитал этой книги / эту книгу.)。ただ、その説明の中には、読者には通じにくいであろうと思われるもの、あるいは、解釈が妥当かどうかについて細かいところで意見が分かれるであろうものが散見される。しかしそれは学習者にとっての本書の価値をいささかも減ずるものではなく、読者はロシア語における表現手段の多様性に対する目を養うことができる。本書のもうひとつの特徴は、日本人の語感とは異なる表現法に対して実用的な注意を向けている点である。例えば、「日本人の語感では対格が期待されるのに他の格や前置詞、副詞が用いられる動詞がある (заниматься русским языком; бояться собаки; играть в теннис; говорить по-русски)」, 「(造格の) 手段の意は方法・原因などの意と重なる。訳に当たっては日本語になじむよう心掛けよう。Анна возмутила меня своим поведением. 『私はアンナのでかたに怒りを感じている』 (アンナはその行動によって私を怒らせた)」など。

格に対して体を扱ったのはわずか 2 課、しかも直説法のみで、読者としては命令形および不定形の体の用法についてより深く知ることができないという残念な結果に終わった。命令形の体については『文法』で 1 頁、また不定形については格の用法の中で一部触れられてはいるものの、『文法』のまえがきにあるように「会話・通訳・翻訳能力の準備まで」を目指すとなれば、やはり片手落ちと言わざるを得ないであろう。また、直説法も例文および練習問題共にほとんどが肯定文というのは、実用的見地からも問題が残る。ところで、「不完了体過去の基本的用法」の項を見ると、例文として次の 2 つが挙げられている (ゴシック部分、訳・註もそのまま引用)。

(1) Он молча надел пальто, взял шапку и ушёл.

彼は黙ってオーバーを着、帽子を手にし、出ていった——過去における完結された (結果に至った) 具体的な出来事

(2) —Вы взяли в библиотеке «Доктор Живаго»

Бориса Пастернака?

—Взял.

「図書館からパステルナークの『ドクトル・ジバゴ』を借りたのはあなたですか」

「私です」—— 結果の残存

比べてあるのは動詞 *взял* であるが、(2)について本書では、質問は「(……借りて)、本は今あなたのところにあるか」という点に向けられ、その答も「借りて今私の手元にある」ことが含意される、とされ、その理由として「完了体過去の主語は過去の動作の結果の保持者であるから」との説明がされている(129–130頁)。このことの是非はここではさておくが、読者としては、この説明と例文訳および元のロシア語文とが微妙にずれていることにとまどいを覚える、と同時に、質問文の疑問イントネーションの中心をどの語に置いて発音すればよいのかについて大いに迷うことだけは確かである。一方、(1)の *взял* については、「(手に取り)、帽子は今彼の手許にある」という意味はなく、「『手に取った』という完成を見た出来事を乾いた事実の記述として行うに過ぎない」とある。これはこれでそれなりに明快な説明であるが、読者によっては、「もしかしたら彼はその後ずっと帽子を手にしたまま歩いているかもしれないではないか」と言う人もいないとは限らない。実際その通りで、完了体である以上語彙的に可能な動詞はすべて文法的意味としての「結果の残存」を明示する。ただ、出掛けに帽子を手に取りという行為は通常はそれを頭にかぶるための過渡的動作にすぎず、そのまま手に持ち続けていることは普通はない。一方、この叙述文はより大きな叙述の一部であろうと想定されるが、そこで述べられている世界に外的な「今」を直接持ち込むことは読者の混乱を招きかねない。

第2部「表現法」は大まかに言って「同義語・同義的表現」および「反転語・反義語」を扱ったものである。前者については、「言語をマスターするということは、事柄を時に応じて適切に表現する能力を獲得することに行き着く。そのためには一つの事柄を、様々な語彙や文法の形を用いて多様に表現する力を養う必要がある。同一の意味を表現するさまざまな手段を、より多く獲得すればするほど、その言語をしっかりと習得したことになる」という正当な理念に基づいたものであるが、文法的な同義表現については、上で見てきたように、第1部の格を扱った課ですでに論じてあるので、第2部では語彙すなわち同義語の記述に多くの紙面が充てられた。特に第1課はロシアで刊行された同義語記述辞典のオリジナル原稿の一部を和訳したも

ので、これによって読者としては同義語を意識的に把握する目を持つことの大事さを知ることができる。ただ、学習者にとって必要なのは、頻度の高い語彙を中心に簡潔性と実用性に富んだ同義語ハンドブックであって、その意味で、原因を表す前置詞および接続詞を扱った課はきわめて有益である。なお、同義関係にある動詞接頭辞について一節設けてあるが、文法参考書としては、動詞接頭辞のみに留まらず、語形成全体を略語・合成語などをも含めて体系的かつ有機的に示すということもあってよかったのではないか。

第2部のもう一つの目玉である「反転語・反義語」であるが、反義語はともかく、反転語というのはおそらく大多数の読者にとって初めて目にするテーマであろう。本書で扱っている反転は、例えば *Анна продала машину Ивану за 100,000 рублей. → Иван купил машину у Анны за 100,000 рублей.* などのように、基本的に主客関係の軸に沿ったものであるが、反転表現として学習するには内容・日本語訳から見てもやや無理があると思われるものも少なくはない。例えば、*Мы истратили все деньги. → У нас вышли все деньги.* 「私達は金を全部使い果たした」→「金は一銭も私達の手許に残らなかった」の場合、前者はお金を使ったのは私達であるのに対して、後者の場合は必ずしも私達とは限らない。なお、反転表現としての「能動態と受動態」を扱った一節に関連して、中・上級者向けに *—ся* 動詞についてせめて1課は設けて欲しかった。

いずれにしても、反転表現というのはいわば言い換えであって、文レベルと語結合レベルのちがいがそこあれ、第1部の格の用法で扱った同義表現と本質的に同じ性格のもので、本書を貫く精神は、言語における範列関係にその前提を置いている。しかしながら範列関係と同時に連辞関係、言い換えれば統語論も視野に置く必要があろう。というのも、口頭でロシア語を使う場合を除けば、手紙を書く、あるいは、まとまった文章を読んで情報を取る、などの作業が現実にはロシア語を使う場合の大きな部分であるからである。本書の著者にはその続編として中・上級者向けに、句読点の使い方から文章構成に至るまでの体系的なシンタクスの参考書の上梓を期待するのはひとり書評子のみならず、ロシア語実務に関係する少なからぬ人たちの潜在的な要望でもある。

(よねしげ ふみき、外務省研修所)